

No.69 マーティン・キッペンベルガー —無題—

Martin Kippenberger

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 12月15日付 立川市市報記事より

キッペンベルガーの作品は、サンタクロースの顔の部分に赤い電球が入っていて、街灯として歩行者専用道路に設置されている。

サンタクロースはクリスマスに欠かせない子どもたちの人気者だが、ファーレ立川のおじさんは、ちょっと変わっている。かつては良い子であったはずの作家キッペンベルガー自身をしかっているのである。

「君は文明の汚れとともに汚れてしまっているよ。」

彼自身は自分の作品を、皆の息抜きのために作っているという。それは偉かったり大げさなものではない。「キッペンベルガーは面白かったよ」と言ってもらえればうれしいのだ。赤い顔をしてクリスマスの夜、立川を歩くサンタクロースを想像するだけで楽しい。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

結局、私は一つの全体として、間違いなく常に生きた乗り物として存在しているのです。

おそらくこれは他者によって特定のスタイルを与えられ、よりの確にプロジェクトに適用されるということなのでしょう。

役割を演じるということは、私の場合は機能しないでしょう。

何故なら、私はスタイルをもっていないからです。何もありません。

その証拠は私の幼年期にさえ見出すことができます。

私の父は常にスタイルをもつことが重要だと言っており、私は自宅にかかっていたシャガールやデュビュッフェのような絵を自分は決して描けないのではないかとひどく恐れていました。私のスタイルとはまさに私の個性のありかたであり、それは行動と決意によって達成され、そしてある歴史は芸術から発展するものであるということを実感するまでは。

芸術とは、実際、常に事実の後に—20年後と言ってもいいでしょう—外から眺められるものであって、制作された瞬間であることはめったにないのです。

その後に、作品や作家がどんな影響をもったかが最終的に決定されるのです。

人々がその時私についてどんな話をするかしないかが重要になります。

私がよいユーモアを広め、それに取り組んでいるかどうか、その結果人々はこう言うことができるでしょう、「キッペンベルガーはいい娯楽だったよ！それに彼は様々な主題の小さなディテールを見つけだしては、それによく取り組んだよ」と。

こんな風にやるのは容易なことではありません。ただ挑発的にいるだけでも、愛らしくしているだけでもだめなのです。

この目標に達するための私のルールとは、次のようなことです。

“私は歯医者たちの興味の対象とはならない、居間のソファの上にかけてられる絵を描く者として扱われるようなことには決してなってはならない—もっとも台所代を払えるように、小さな絵、そのうちの数点は完全に“居間のソファの上にかかっている”もののように見えますが—をつくることは自分に許していましたが。

しかし、それらは例外でなければなりません。

私の作品の2%がそんなふうです。

私は自らにそうすることを単純に許しています。

それは私のぜいたくであり、その結果、ある絵画についての人々の誤解が増幅されることを私は願っています。

私は常に現瞬間のために仕事をしなければなりません。

個人としてのこの時は短いのですから。

それ自体で自立できる、自らを証する何かを築き上げるために、私はあらゆる手段を使います。